口頭発表「教室内動物飼育が子どもに与える教育的効果に対する調査結果」

阿部　温

１　目的

小学校内での動物飼育体験が子どもの発達に及ぼす影響について，我々は 2008 年より本調査を開始し，2009 年の第 10 回大会での中間発表では，１年生の向社会的行動，および５年生の共感性において教室内でのウサギの飼育体験による良い影響があることが示唆された．これを受けその後も調査を継続し，その影響について分析検討を行うことで，今後の小学校における動物飼育や動物愛護指導等への参考とする．

２　調査１

本調査では，子どもの発達の側面として向社会的行動，共感性，及び自尊感情の発達への影響を検討した．

(1)　方法

①対象児童

小学校４，５，６年生，合計３４２名とした．内訳は以下の通りである．

	室内飼育群	屋外飼育群	飼育無群
４年生	２０名	２９名	６５名
５年生	３２名	３０名	５４名
６年生	２８名	３３名	５３名

②手続き

教室内飼育校（教室内飼育群），屋外飼育校（屋外飼育群），及び飼育無し校（飼育無群）に対して，動物飼育開始前と１年後に質問紙法により学級担任によりクラス単位で実施した．

③尺度

使用した尺度は，向社会的尺度，共感性尺度，及び自尊感情尺度を用いた．また，その他の質問項目として，家庭での動物飼育経験の有無，動物への好悪感情についても行った．

(2)　結果

①尺度の信頼性

向社会的行動尺度の信頼係数は，４年生α＝.792，５年生α＝.776，６年生α＝.789，共感性尺度の信頼係数は，４年生α＝.821，５年生α＝.746，６年生α＝.859，自尊感情尺度の信頼係数は，４年生α＝.852，５年生α＝.871，６年生α＝.836 であり，いずれも信頼できる尺度と考えられた．

②４年生の結果

自尊感情において，屋外飼育群，及び飼育無群では，１年後の平均得点にほぼ変化が見られなかったが，室内飼育群では，１年後の平均得点の上昇が見られた（表２，図１）．向社会的行動，共感性においては，３群とも差は認められなかった．

	室内飼育群	屋外飼育群	飼育無群
１回目	2.96	3.54	3.06
２回目	3.47	3.53	3.04

表１　４年生における自尊感情の平均得点

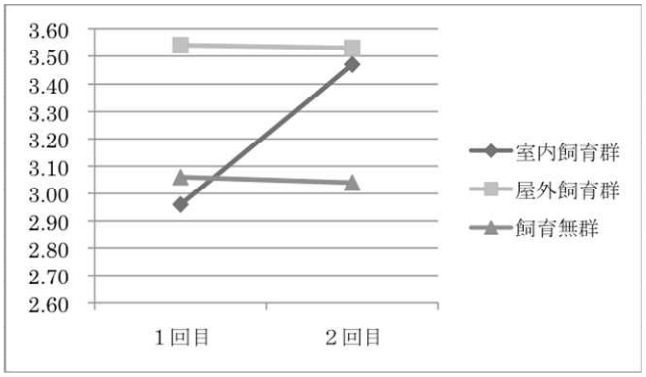


図１

③５年生の結果

自尊感情において，飼育無群では，１年後の平均得点の下降が見られたにも関わらず，室内飼育群，及び屋外飼育群では，平均得点の上昇が見られた（表２，図２）．向社会的行動，共感性においては，３群とも差は認められなかった．

	室内飼育群	屋外飼育群	飼育無群
１回目	2.57	2.85	3.41
２回目	2.86	3.08	3.21

表２　５年生における自尊感情の平均得点

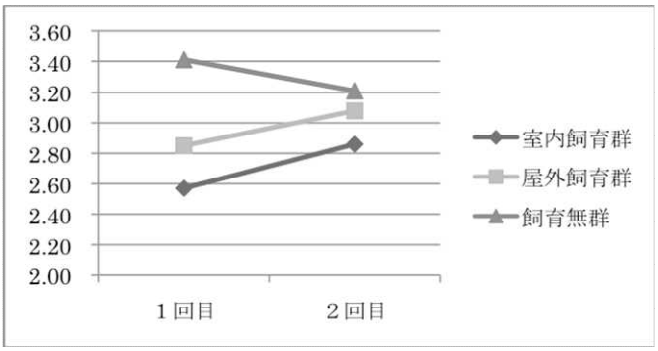


図２

④６年生の結果

自尊感情において，屋外飼育群では，１年後の平均得点の上昇が見られ，飼育無群では，平均得点の減少が見られた（表３，図３）．向社会的行動，共感性においては，３群とも差は認められなかった．

	室内飼育群	屋外飼育群	飼育無群
１回目	3.04	2.85	2.99
２回目	3.02	3.01	2.84

表３　５年生における自尊感情の平均得点

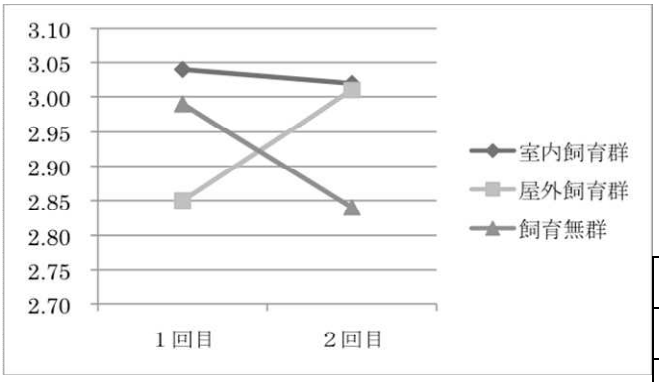


図３

⑤家庭での動物飼育の有無による差

４年生での向社会的行動をのぞき，全ての学年全ての項目において，家庭での動物飼育経験がある方が平均得点は高い．また，５年生においては，t 検定の結果，向社会的行動，及び共感性においては５％水準で有意であり，自尊感情においては10％水準で有意傾向であり，家庭での動物飼育の経験がある方が平均得点は高かった（表４，図４，表５，図５，表６，図６）．

	向社会性	共感性	自尊感情
飼っている	3.45	3.78	3.22
飼っていない	3.59	3.77	3.08

表４　４年生における家庭での動物飼育の有無による平均得点の差

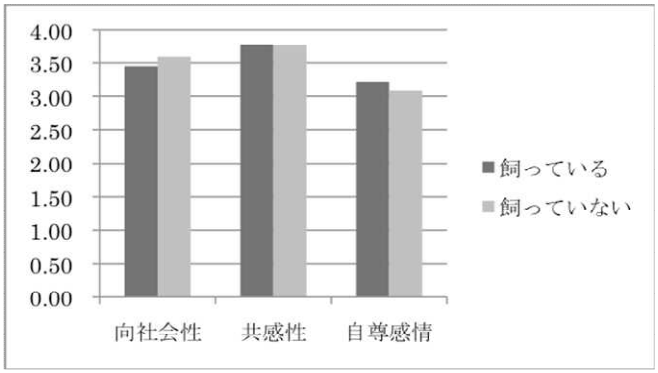


図４

	向社会性	共感性	自尊感情
飼っている	3.62	3.74	3.17
飼っていない	3.28	3.44	2.87

表５　５年生における家庭での動物飼育の有無による平均得点の差

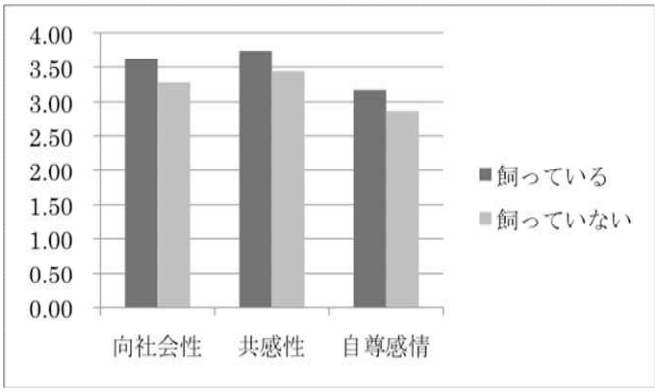


図５

	向社会性	共感性	自尊感情
飼っている	3.48	3.57	2.99
飼っていない	3.27	3.47	2.93

表６　６年生における家庭での動物飼育の有無による差

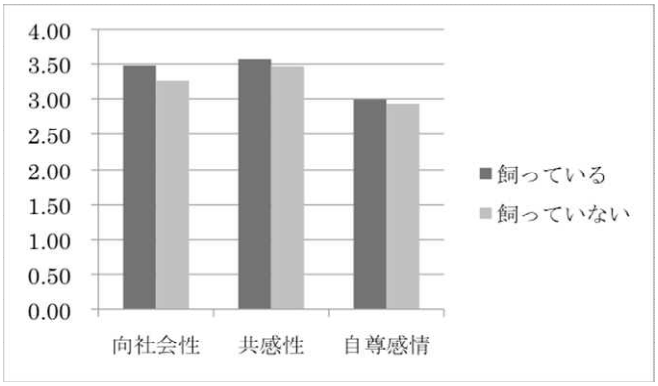


図６

３　調査２

本調査では，校舎内でウサギを飼育した体験により，児童自身がどのように思い，感じたのかを，自由記述により行い，ウサギ飼育の教育的効果を検討した．

(1) 方法

① 対象児童

校舎内でウサギを飼育し，また，そのウサギの死に直面した児童を対象とし，１年生 33 名，２年生 30 名，３年生 21 名，４年生 22 名とした.

②手続き

自由記述の質問紙法により，学級担任の指示の元，クラス単位で実施した.

③質問内容

・質問１　クラスでウサギを飼ってみて思ったことや，世話をして思ったこと.
「クラスでウサギをかって９ヶ月がたちました. ウサギをかってみておもったことや, せわをしておもったことをかいてください」

・質問２　ウサギが近くにいて，よかったと思ったことはあるか.
「ウサギが近くにいて，よかったとおもったことはありますか」

・質問３　ウサギが亡くなってしまい，どのように思ったか.
「とてもざんねんですが，ラッキーやロップやゼロスターがなくなってしまいました. このとき，あなたはどのようにおもいましたか」

・質問４　これからも，校舎の中でウサギを飼っていきたいか.
「これからも，こうしゃのなかでウサギをかっていきたいですか」（はい，いいえ）で回答

(2) 結果

質問１から３の自由記述の回答を，質問ごとに子どもたちの記述から帰納的にカテゴリーを作成し，分類した．なお，複数記述があり，複数のカテゴリーに分類できるものは，各カテゴリーにそれぞれ１回ずつカウントした．また，同一カテゴリーの場合は，複数記述があっても，１回のみカウントした.

①ウサギを飼って思ったことや世話をして思ったこと

子どもたちの自由記述を表７−１のようなカテゴリーに分類した．結果を表７−２に示す.

１年生ではポジティヴな感想が半数以上であるが，ネガティヴな感想を記述した者が約２割，両側面を記述した者が約３割である．約８割の者がポジティヴにとらえているが，他の学年に比べてネガティヴな感想を記述した者が多い．２年生では，両側面の記述者が半数で，他の学年に比べて多く，全体の９割がポジティヴな感想を持っている．３年生では，ポジティヴな感想を書いた者が５割強で，両側面を記述した者が２割強，ネガティヴな感想を書いて者は一人もおらず，約８割の者がポジティヴな感想を記述している．また，ウサギの行動を記述した者が約２割おり，他学年に比べて多い．４年生では，ポジティヴな感想と両側面の感想を書いた者が９割以上である．全体では，ポジティヴな感想が約半数で，ネガティヴな側面をおさえながらもポジティヴにとらえていると考えられる感想が３割強である．一方，ネガティヴな感想を記述している者は１割にみたない.

以上のように学年により特徴はあるが，全体として子どもたちはウサギの飼育をポジティヴに捉えている者が多いと考えられる．また，ネガティヴな側面を受け止めながらもポジティヴに捉えている者がいるということは，単にかわいいというだけでなく，世話の大変さを知りながらも動物飼育をポジティヴに捉えていることであり，これは重要な学びではないか考えられる.

②ウサギが近くにいてよかったと思ったこと

子どもたちの自由記述を表８－１のようなカテゴリーに分類した．結果を表８－２に示す.

１年生と２年生では，うれしかったなどの快感情について記述した者がもっとも多く，３年生なると，気持ちがいいなどの心理的安らぎに関する記述が最も多く，次いで，元気がでるなどの心理的回復の記述が多くなる. そして，４年になると，癒されるなどの心理的回復に関する記述が８割近くみられようになる.

③ウサギが亡くなってしまい，どのように思ったか

子どもたちの自由記述を表９－１のようなカテゴリーに分類した．結果を表９－２に示す.

すべて学年で，「悲しい」などの自分自身の悲しみに関する記述がもっとも多く，次いで，「かわいそう」などのウサギへの思い記述が多い．また，４年生では，命の大切さを感じたという記述がみられている.

④これからも，校舎の中でウサギを飼っていきたいか

３年生に，無記入の者が１名いたが，それ以外の全員が，「はい」と回答している.

４　生活科における継続的な動物飼育に関する調査

生活科における継続的な動物飼育に関する小学校の現状を調査する為，群馬県教育委員会から，群馬県内の小学校３３６校を対象に，アンケート調査を行った．結果を表１０に示す.

現在のウサギの飼育場所は，大多数が屋外で飼育を行っている．また，飼育上の課題として長期休業中の世話，次いでエサ代などの経費があげられている．他にも飼育設備の老朽化など，経費に関わる課題が上位を占めている．動物を飼育して

表７－１　世話をして思ったこと分類カテゴリー

ポジティヴ感想	ウサギやウサギに世話についてポジティヴな感想を記述
ネガティヴ感想	ウサギやウサギの世話についてネガティヴな感想を記述
ポジティヴ・ネガティヴ感想	ウサギやウサギの世話について、ポジティブな側面とネガティブな側面の両側面の感想を記述
ウサギについての感想	ウサギに対する感想を記述

表７－２　世話をして思ったこと感想記述者の人数

	１年 (N=33)	２年 (N=30)	３年 (N=21)	４年 (N=22)	全体 (N=106)
ポジティヴ感想	18(54.5)	12(40.0)	11(52.4)	13(59.1)	54(50.9)
ネガティヴ感想	7(21.2)	1(3.3)	0	1 (4.5)	9(8.5)
ポジティヴ・ネガティヴ感想	9(27.3)	15(50.0)	5(23.8)	9(40.1)	38(35.8)
ウサギについての感想	2(6.1)	2(6.7)	4(19.0)	0	8(7.5)
未記入	0	0	1(4.8))	0	1(0.9)

（　）内は％　　＊複数回答者あり

表８－１　ウサギが近くにいてよかったと思ったことの記述内容カテゴリー１

心理的回復	元気が出るなど、心理的な回復についての記述
心理的安らぎ	気持ちがよくなるなど心理的に安らぐことについての記述
快感情	うれしかったなど、快感情を記述
行動面	遊べてよかったなど行動面についての記述
ウサギに対する思い	かわいかったなどウサギに対する思いの記述
ウサギの行動記述	ウサギの行動についての記述
その他	上記に含まれないポジティブなもの
ウサギがきて大変だった	ウサギがきて大変だったという記述
ない	ないと書かれたいもの
未記入	記入がない

表８－２　ウサギが近くにいて良かったと思ったこと（カテゴリーごとの人数）

	１年 (N=33)	２年 (N=30)	３年 (N=21)	４年 (N=22)	全体 (N=106)
心理的回復	2(6.1)	3(10.0)	5(23.8)	17(77.3)	26(24.5)
心理的安らぎ	2(6.1)	5(16.7)	6(28.6)	1(4.5)	14(13.2)
快感情	12(36.4)	12(40.0)	3(14.3)	2(9.1)	29(27.4)
行動面	2(6.1)	4(13.3)	2(9.5)	0	20(18.9)
ウサギに対する思い	9(27.3)	4(13.3)	1(4.8)	0	14(13.2)
ウサギの行動記述	2(6.1)	1(3.3)	0	0	3(2.8)
その他	4(12.1)	3(10.0)	2(9.5)	2(9.1)	8(7.5)
ウサギがきて大変だった	1(3.0)	0	0	0	1 (0.9)
ない	0	1(3.3)	0	0	1(0.9)
未記入	0	0	4(19.0)	0	4(3.8)

（　）内は％　　＊複数回答者あり

表９－１　ウサギの死に対する思いの記述内容カテゴリー

自分自身の気持ち	悲しいなど子ども自信の気持ちについて記述
ウサギへの思い	かわいそうなどウサギへの思いについて記述
これからの思い	次にウサギを飼ったときにウサギにしてあげたいことについての記述
命について	命についての記述
未記入	記入なし

表９－２　ウサギの死に対する思い　カテゴリーごとの人数

	１年(N=33)	２年(N=30)	３年(N=21)	４年(N=22)	全体(N=106)
自分自身の気持ち	24(72.7)	23(76.7)	17(80.1)	16(72.7)	80(75.5)
ウサギへの思い	9(27.3)	6(20.0)	5(23.8)	4(18.2)	24(22.6)
これからの思い	1(3.0)	0	1(4.8)	3(13.6)	5(4.7)
命について	0	1(3.3)	0	4(18.2)	5(4.7)
未記入	0	0	0	1(4.5)	1(0.9)

（　）内は％　　＊複数回答者あり

いない小学校は，全体の６分の１に当たる 60 校であった．

来年度の予定では，飼育小屋などの屋外で飼育を予定している小学校が大多数であった．

		合計
調査１ 希望の有無	①　ウサギ（ホーランドロップ種）希望数	27
	②　モルモット希望数	21
調査２ ウサギの飼育場所	①　教室内で飼っている．	6
	②　廊下で飼っている．	3
	③　屋外の飼育小屋で飼っている（下が地面）．	134
	④　屋外の飼育小屋で飼っている（下がコンクリート等）．	98
	⑤　飼っていない．	119
調査３ 飼育上の課題	①　長期休業中の世話が大変	241
	②　飼育設備がない	20
	③　飼育設備の老朽化	95
	④　えさ代などの経費	113
	⑤　児童が世話を続けられない	39
	⑥　特に困っていない	24
	⑦　動物を飼育していない	60
調査４ 平成２３年度の予定	①　１年生（２年生）の教室内か廊下で，ウサギやモルモットを飼育	18
	②　１年生（２年生）の教室内か廊下で，ウサギやモルモット以外の小動物を飼育	12
	③　飼育小屋でウサギや鳥類を飼育	224
	④　検討中	87

表１０　生活科における継続的な動物飼育に関する調査結果

５　考察

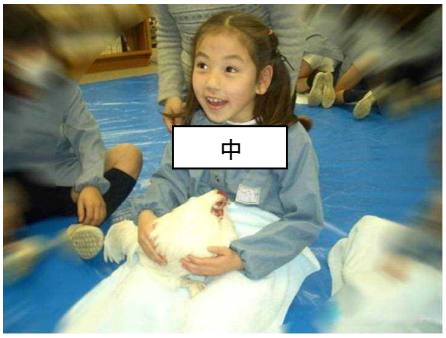
調査１の結果では，自尊感情において飼育無群では１年後の平均得点の減少が見られているにも関わらず，動物を飼育している群では上昇が認められることから，学校動物飼育体験による効果が示唆された．また，家庭での動物飼育の有無による比較では，家庭で動物を飼育している群の方がしてない群に比べ平均得点が高く，５年生においては向社会的行動及び共感性においては有意に高くなっている．また，これまでの国内外の研究結果と同様の結果がえられており，動物を飼育し，世話をすることは，子どもの発達にプラスの効果をもたらすと考えられる．

調査２の結果では，子どもたちは，校舎内で身近にウサギを飼育，世話をすることで，動物に対する親しみが生まれながらも，世話に伴う大変さを感じることで，動物飼育はある程度の自己犠牲を伴い，相手の立場や考え方が理解できるようになったのではないかと考えられる．

また，校舎内でウサギを飼育することは，子どもたちの感情的にも，心理的にも良い影響をもたらすとことが示唆された．

さらに，みんなで飼育していたウサギの死に直面した後，またウサギを校舎内で飼育したいとの新たな思いが芽生えたことは，ウサギの死に対する悲しさやつらさを克服し，命の大切さを実感することができた結果ではないかと思われる．

小学校で動物を飼育するにあたり，各学校の特徴，特色を生かし，学校にあった動物を飼育し，しかも適正に飼育できる範囲で行うことが重要でないかと考える．動物１頭飼育するのにも，必ず経費がかかるため，事前に飼育方法や予算立てを行い，動物を飼育していくことで，小学校での動物飼育における課題を少しでも改善できるものと思われる．

今調査が，今後の小学校で動物を飼育する上での参考となってくれれば幸いです．

（群馬県獣医師会学校動物愛護指導委員会）